

一年目を振り返り、そして・・・

小川 知子

志していた幼稚園教諭としての生活が始まり一年半が過ぎた。昨年度に引き続き、年長児を受けもっている。年間行事は昨年度とさほど変わらないので

「去年はどうだったかしら？」と聞かれるが、私は「さあ……？」と全然覚えていない。余裕のない一年間を過ごしていたと改めて感じる。そんな一年目

を私なりに振り返り、反省しながら、保育を見直したいと考える。

一年目を振り返る上で、書かずにはいられなかったのがA児だ。「始業式の日、『先生、先生』と盛んに話しかけてくる」という記録から始まっている。

一斉活動の時は恥ずかしくてべったりと身を寄せ教師の指までなめてきた。A児のことをおや？ と感じたのは一学期半ばのことだった。私の背後からA児を含む三人の女児の「あいつ、きもいよね」という言葉。耳を疑いかなり動揺しながら三人の顔を見た私にわざと聞かせるようにA児は「別に誰かって言っていないもんねー」と言い友達と顔を見合わせた。そんなことは絶対に友達に言っではいけないと論じたが、その場限りの注意で終えている。その後気にかかったが、A児とスキンシップを多くとり、子どもらしい笑顔や甘えが出てきたことにすっかり安心して一学期が終わった。しかし二学期になると一斉活動のたびに「嫌だ」を連発するようになった。必ずA児を待ったり友達が呼びに行くようにしたが、物影に隠れたり、時にはごろんと転がり赤ちゃんのように駄々をこねることもあった。そして彼女のお気に入りの場所になったのが、ピアノの陰

にできた小さな三角のスペース。ままごとをする時はそこに大量の布団を持ち込み、必ず赤ちゃん役になりごろごろする。片付けになるとその場所に隠れる仲間を探しては「片付けなんてやらないもんねー」と教師に言い捨て逃げ去る。皆と一緒にするべきことはさせたいと考え一対一で向き合い「今はやろう」と伝えるが、対面することを避けるように体の力をだらんと抜き私が抱き起こすこともあった。壊れたラジカセのピーツという機械音を大音量でかけた時には、このイライラしているA児の気持ちに徹底的に沿おうとA児とともに新聞紙をビリビリ破いたこともある。そのうち仲の良かったM児もA児と同様に「嫌だ」を繰り返すようになったり、学級活動にA児が来ない姿を見て「またAちゃんだ」というつぶやきが出るようになった。A児の行動が学級に連鎖し始めた。

ある日、隣の学級の先生がA児と向き合い、その

周囲には両学級の子どもの人だかりができた。先生は真剣にA児の目を見つめ、A児が脱力しようとするのと引つ張り起こすのではなく「ちゃんと聞きなさい」と叱責した。A児はぶすつとするが目は先生と合わせ、体を自分で起こす。周囲から口々に「Aちゃん集まりの時に来なくて……」「ちゃんとしてほしいのに」など今までA児に直接言うことを我慢していた子どもたちの声。それを黙って聞くA児。その光景を目の当たりにして、担任の私はようやく気づいた。

逃げていた。A児と向き合うこと、A児と本気で対面する自分の姿を学級の幼児にさらけ出すこと、私自身がA児に対して判断基準をもつこと（今それをするのはおかしい、その気持ちは受容したいなど）。おそらく私が「どうしよう」と迷ったり、「困った」と投げ出したい気持ちになったり、それでも学級の体裁を整えることばかり気にしていたこ

とをA児は見透かしていたのだ。その当時は単なる現象としか捉えていなかったA児の一学期の姿をもう一度読み返すと、大人の気持ちをどうにかしてひきつきたい、もつと私を見てというシグナルを発信していることに気づかされた。「一斉活動をしないA児にどうやってさせるか」よりも「A児はなぜこんなに私を困らせたのか」「彼女の内面を真剣に知ろうとする教師の姿勢」が必要だったのだ。

先輩からの助言もありその後は、「○○しなければならぬ」ということは毅然とした態度でA児に伝えようと心がけた。しかし怒るだけではなく、A児のことはちゃんと見ているという信頼関係をより一層深めようと、A児の長所をたくさん探した（足が速い、二重跳びができる、友達に教えてくれる、等）。そして友達と一緒に遊んで本当に楽しいと十分に感じられるように私もA児と同じ目線でたくさん遊ぶようにした。すぐに変化が出たわけではない

が、以前のような「嫌だ」は少しずつ減り、A児にとつての幼稚園生活が窮屈ではなくなってきた。卒園間近、学級の仲間を誘い屋上で影踏みを嬉々として楽しむA児を見て『かわいくて仕方がないなあ』そんな素朴な感情を抱いて感慨にふけていたことを思い出す。

「先生ハムスターの餌ちょうだい。Yちゃんが探してるの。」

先日N児の一言を聞いて私は一年前のS児のことをはっと思い出した。

昼食後園庭で色水遊びをしていたはずのS児が保育室（二階）までやってきて、「先生、Jちゃんの○○どこにある？」。その時の私は『なんでJ児のものS児が取りに来るんだろう？』『なんでわざわざ靴を履き替えてまで暗い顔で取りに来たの？』。

強いては『バシリ!? いじめの元凶?』とまで私の頭の中は大暴走……。

S児、J児はR児とともに三人で過ごすことが多かった。頭の回転がよく手先も器用なJ児が三人の中ではリーダー格。しかし学級全体の中ではとても無口で案外三人の関係の中で支えられていたように感じる。S児は製作が好きだが自信がもてず、いつもJ児の陰にいた。S児には仲良しのJ児の言いなりにならずに自分の思いを素直に言えるようになってほしい、三人だけの遊びがもつと周囲にも伝わってほしい、いろいろな友達とのかかわりをもつてほしいというの彼女たちへの願いだっただけだ。

私「え？ 誰が探しているの？」。S児小さ



い声で「Jちゃん」

私「SちゃんはJちゃんに言われて取りに来ただ」だ。S児うつむく。

私「遊んでいる途中だったのに嫌だと思って思わなかったの？」。S児は黙る。

私「嫌だったの？」。S児「嫌じゃない」

私「ほんの少し嫌だったの？」。S児「うん」

私「そうかあ。嫌だと言ってえなかつたんだ」

この時私はS児の気持ちを勝手に推測し、どうか「嫌だ」という言葉を引き出そうとしていた。それが彼女にとって「素直な自分を出す」ことにつながるかと考えたからだ。

このエピソードを話した時、先輩から「三人の関係性の中で自分を發揮させるように援助しないとね」というアドバイスをもらった。関係性……。もう一度振り返ると、私はS児と面と向き合いながら、J児のいない場所で彼女への思いを誘導し引き

出している。その時のS児への願いは、J児を含めた気の合う友達関係の中で素直に自分の思いを出すことだった。三人の中でS児が得意なことを表現できるように援助し、三人の中でJ児がS児のことを認めるようなことを表現できるように援助し、三人の中でJ児がS児のことを認めるようになった時、関係性は変わってくるのではないだろうか。そう考え直すことができた。

さて前述のN児。新しい環境に戸惑い、教師と一緒に友達の中に入ることが多かった四月。「やってみようかな？」と確認するように話しかけるが、教師の「いつてらっしゃい」の一言を聞くと安心して友達の中で遊び出すようになった一学期後半。今では「○○しない？」と友達に提案したり、友達の考えに「いいね。じゃあこれもしよう」と賛同し、気の合う友達の中で少しずつ自分を出せるようになった

てきた。N児のように少しずつ自己発揮して遊ぶようになってきた女兒の中で不安を見せるようになってきたのが「餌をとってきて」と言ったY児だ。一学期はY児のようにてきぱきと自分の考えを伝え、興味あることに飛びつく存在は女兒の中で新鮮だった。N児もY児が少し強引でも遊びに引き込んでくれたことで仲間とのつながりを楽しいと感じることができた。しかし個々のやりたいことがはっきりしてきた二学期、「○ちゃんは入れない」と友達を排除したり、「お客さんじゃないとだめ」と遊びの役割を指示するY児の気になる姿も出てきた。

この日N児に話を聞くと「Yちゃんがハムスターと遊んでいるんだけど、餌がないから取ってきてって言われたの」。どこか困ったような表情の、それでもY児の遊びの楽しさには惹かれているN児。力関係が微妙に変化しつつある女兒たちの仲間関係。これが今の実態であることを受け止めながら、この

グループの中でお互いが自分の気持ちを伝え合えるようになってほしい。ではのために私はどんな援助をしようか。N児は最近流行り始めたお部屋さんごっこの中で得意の製作を生かし自信をもって友達に自分の気持ち伝えられるように援助しよう。Y児は友達の気持ちを感じられるように援助しよう。教師がN児やY児に諭すのではなく、友達との関係性の中で育っていくように……。

一年目に出会った子どもたちや先輩方から教えられたことが二年目になったから全部できるといふことはない。それでもやはり去年よりは少し成長して保育したいな。そんな願いをもちつつ日々保育をしている。さて明日、N児やY児はどんな姿を見せるだろう？

明日も楽しみだな！

(目黒区立からすみ幼稚園)